



奈良女子大・松岡研究室のゼミで(左は教官の松岡悦子教授)

今、生き生きと 24 助産師 市川 きみえ (いちかわ きみえ) さん

昨年町内に移住して助産院を開設しました。「女性にとって、家族にとって、生まれてくる子にとって、良い状態で生まれてくることはすごく大事なんだ、と伝えたい」「ここは自然の大地として最適、と感じてこの町に来ているので、できることなら病院と提携して、地域に根づいて助産をしていきたい」と家族を大阪に残し、一人奮闘の日々。出産も自然の営みも健康と連動しているーと。

大雪山旭岳とこの地を流れる天然伏流水。町全体がパワースポットだと感じているよう。

「いつかはここで取り上げを指したい」と開いた助産院。医療法の制限があるため、現状では助産所でお産の取り上げをすることが出来ません。今は「お産墊」「いのちカフェ」「おっぱいマッサージ」を開いています。

「北海道に来て驚いたのは、北見にいた時に学生を釧路日赤病院に実習に連れて行ってみると、根室地域にお産を扱う病院がなかったこと。なので計画分娩(ぶんべん)を進めていました。そうでもしないと、女性は子供を産めないよ」「それって女性の尊厳ないよなあ」って…。

「去年の10月、年間300人くらいお産を取り上げていた遠軽厚生病院が分娩の取り扱いを止めました。紋別に病院はあるけれど、子どもを産もうと思ったら北見に行くしかない。女性はお産難民なんです。自分たち家族で産んでしまおう、という人も出てきている。これからもっと増えるんとちゃうかな」。



自宅を会場にして初めて開いたアロマ教室

「学校では病院のお産を教えられました。だからお産は病院が当然と思ってきた。でも自分で子どもを産んでみると、何かが違った」。それは、



第1回シンポジウムの後、参加者と一緒に自宅で開いた懇親会(昨年8月)

生まれたわが子がすぐに新生児室に連れて行かれてしまうことでした。

「生まれてすぐ赤ちゃんを引き離されてしまう。お産が流れ作業みたいな扱い。これが違和感の理由だったんですよ」。

「2人目を産んでみて女性の幸せを感じたんです。2人目は自分の子と一緒にいたい、と産む場所を探しましたから。当時はまだ地域に助産院がありませんでした。『やっぱりお産ってこれだよな』って…」。

「大阪の病院、産婦人科医院で助産師をしていた時、どんなお産に出合ってたかを伝えたい。ど

市川きみえさん

広島県福山市出身、54歳。大阪市立助産婦学院卒業。1984(昭和59)年助産師。昨年町内に転入し、同年6月から「助産院パースカムイ」(北町3)を開業。立命館大学大学院応用人間科学研究科修士修了、国立奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程在籍。大阪府内の病院勤務後、八尾市内の産婦人科医院で約20年間勤務。その間、八尾市保健センター訪問指導員、柏原市保健センター両親教室講師。日本赤十字北海道看護大学(北見)、名寄市立大学でそれぞれ2年間講師。昨年8月、助産院パースカムイ開院記念第1回シンポジウム「自然といのち」を開催(東川環境改善センター)。自然分娩に取り組んだ20年間の記録を書いた著書に「いのちのむすび」(2014年10月、晃洋書房)。

うすれば安産で生まれるか、家族と一緒に産んで迎えるためにはどうすればいいか。女性はみんな、一人目を産んでみて「こんなはずじゃなかった」って結構思っている。寄り添って、一緒に考えていきたいんです」。